

Title	「義山・びいどろ」其の壺：近世がらす考
Author(s)	奥戸, 一郎
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 105-106
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53256
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

義山・びいどろ 其の壺 近世がらす考

奥戸一郎

がらすには古い歴史があり、現在では世界各地で製造され普段のくらしに欠かせぬモノとなった。さまざまな時代や地域で種々のかたちというが生まれ、伝えられ使われてきた。既にがらすの歴史やデザイン、素材や技法について各国で著され研究が続けられている。これは「見果てぬ夢」と「肌身はなせぬ現身」をあわせ持つがらすの魔性の故であろう。ここでは近世がらす「義山、びいどろ」の他に例を見ぬ「夏道具、夏の器」としての我国独自の使い廻し、それらのデザイン意図を考えたい。

がらすの想い出の始めは三歳の真冬、霜焼けでふくれた指を祖母に「びいどろみたいな冷べたい手エして」とさすられた時。ものごごろついて、夕焼けにかざす霜焼けの手から、びいどろは「冷たく」「とろり」と「色が透ける」とおぼえた。「義山」との出逢いは少し後、祖母の他出ゆきの匂いをとじこめた切子の瓶。琥珀の液を底に溜めた撫肩のずしりと重い丸瓶、きしむ共蓋と身に彫った菊に金を埋めた舶来上等の年中使い。夏、大事のお客にだけ出す「ビール飲み」は淡い水色で透かすと虹が出る。カチ割りが涼しく鳴って握る指が切れそうに鋭い12角は佐賀切子と教えられた。盆の霊迎えの高燈籠、牡丹を飾った燈籠はお露の下駄の響きとともに懐しい。いずれも切子と呼ぶ。義山切子の初出は天明だが切子燈籠といずれが古いか、調べがゆき届かぬが近世ガラスの中でもカットがらすが切子と呼ばれ、数あるがらすの中で群を抜いて

好まれた。義山はポルトガル語のダイヤモンドで、透明さと輝きをカットがらすに見たのか、ダイヤモンドで彫刻をするがらす製品を呼んだのか決めたいが、ほんものの金剛石よりも本歌取りの義山切子がなぜあれ程好まれたのか。恵まれた自然を写しとり、それから産みだした文様を愛し、花鳥風月、雪月花に代表される四季の装飾、意匠をくらしのあらゆる場に持ちこみ楽しんだ先人が「がらす」に限って、造型の自在さを百も承知で、飲食器はもとより、文房具、装身具、調度品と数多くの製品を送り出し乍ら「デザインの意図」（かたち、いろ、文様）を「夏」という思い切った趣向に絞り込んだ原因は何なのか。「玉」に近づくのを理想とした中国の陶磁器文化（中国がらすも玉の代替と見做せる）を我国の風土が原点の土くれそのものをいとおしむ「やきもの文化」に生れ変わらせた様に、和の風土が「透明性」「可塑性」というがらすの本質に「水」を感じとり、加えてその冷たさに「氷」を想い、その造型を「水」「氷」の見立てと解けば「義山、びいどろ」を長く暑い夏を凌ぐモノの代表とする和の文化が見えてくる。舶載された欧州、中国がらすの手本を習わず、ひたすら「水」「氷」をデザインし続けた結果が「義山、びいどろ」ではないか。我国の同時期の木、金、漆工、陶磁器の豊かで巾広い「かたち」の展開、「装飾」のあくなき追求とは明らかに一線を画す。「すっきりしたかたち」「飾りのなさ」は「水は器に

したがう」という千変万化の「水」そのものの形状化。装飾文化真直中で自由に文様を意匠出来るグラビール、エナメル絵付け、金彩などの手法を捨て、切子（カットガラス）にこだわり続けたのは「氷の見立て」という意図が作り手、使い手に共有された結果であろう。水に恵まれた我国では、古来より水を題材とする美術、工芸は数多い。中でも源を平安の昔に溯る琳派の水の豊富な表現は、人々に親しまれ愛された。「びいどろ」の持つ曲線、曲面と琳派の水の相似性を考えると「びいどろ」の水緒は源を中古に発し、近世に花開いた「和魂洋才」の典型の一つでもある。又、円、球を「露」と呼び、「水玉」と名づけ夏季の涼を添える便法として衣食住とりどりに活用する知恵も古く、例が多い。これらも水として「義山、びいどろ」のデザインに巧みに取り入れられる。細いがらす棒を並べたびいどろ細工の多くのデザインは歌舞伎、文楽の舞台に残る「滝車」「吹き上げ」「雨」などの見立てとも考えられる。一方「義山切子」に多用される「三角文」「四角文」の組合せを「氷」と見る伝統も古い。天然の冷蔵庫「氷室」の僅かな氷を珍重した例は枕草子にも美しい描写が見られ、各地に「氷室」の地名や遺構が残る。氷献上は宮中、幕府ともに年中行事で一般にもその風習は伝わった。氷を不等辺多角形に造型した銀の薄板を能「氷室」では氷板として舞う。夏越しの祓えに「水無月」と呼んで食す三角の白外郎は氷見立として今も上方の夏菓子の代表である。早春の水の文様化「氷裂文」いずれも、がらすが普及する迄に馴染みの氷であった。舶来の板がらすを戸障子から天井までしつらえた「夏座

敷」は三都に喧伝され、羨望された。この様に「義山、びいどろ」は「水、氷の見立て」として最も適切で無二のモノであり、夏使いのがらすの風は第二次大戦迄全国で伝えられたが、今は失われつつあるのが残念である。

（おくど・いちろう 滋賀文化短期大学）